

検証  
吉田昌郎調書  
⑤

福島第1原発事故の発生当初、想定外の事態に直面した政府と東京電力の指揮命令系統は混乱した。

吉田昌郎元所長は、政府の事故調査・検証委員会の聴取に、菅直人首相ら官邸側と直接電話でやりとりすることが何度もあったと明かし「おかしいと思っていた」と批判した。

調査は、事故現場で確かな連絡手段をどうやって確保するか、指揮系統はどうあるべきか、といった課題を浮き彫りにしている。

「サイト内は非常に広い。建屋や屋外で作業をしている人と免震重要棟の連絡手段は。」

「トランシーバーです。本当はPHSが使えればいいんですけど、最初は全く駄目で、

官邸との電話連絡

「直接はおかしい」



福島第1原発の視察に訪れた政府の事故調査・検証委員会メンバーに状況説明する吉田昌郎所長＝2011年6月17日、福島第2原発の会議室(同委員会提供)

「固定電話です。最初、官邸と電話する気なんかは全くなかったんですけども、官邸に詰めていた人間から官邸が話したいということでした」

「本来は原子力安全・保安院を通じ、官邸に二元的に報告するのは。」

「何で官邸なんだというのがまず最初です。何で官邸が直接こちらにくるんだ。本店の本部は何をしているんだ。向こうからも電話がきますし、何かあったら連絡くれという話があったので、とりあえずそれののってやっていただけです。ずっとおかしいと思っていました」

事故対応の前線基地となるオフサイトセンターは機能せず、保安院への連絡役として本来、免震重要棟に在るべき保安検査

官は、事故発生直後に退避してしまい不在だった。

官邸との電話は複数回に及び、菅氏本人が電話に出ることもあった。

「ごく初歩的な質問を菅さんがして、私が説明を始めたら」ちよっと待ってくれ、その質問は日比野さん(日比野靖・内閣官房参与)がしているから」ということで、日比野さんに代わって、結構忙しいときだったんだと思うんだけど」

「4回ぐらい菅さんが出てきてたんです。『警戒区域と避難区域、20時、30時の話についてどう決めたんだけれども、所長はどう思う』みたいな話をしてきたんです。知りませんと。(放射性物質が)どれぐらい飛散するかという話はこちらで計算しているわけではないんですけど、こちら側の解析しているところで評価してくれと、現場の判断ではないということも申し上げました」(肩書は当時)

このトランシーバーもパワーが弱いんです。建物の陰などに行くとつながらない。なおかつ全面マスクですから声が通らないわけです。ものすごいいらいらしました。ですから、あの通信だけは何とかしなければいけない」

「ファクシミリは。外に発信できなかった。本

当は自治体、町だとか県などに一斉にファクスするんですが、それが最初は全然できなかった。2F(福島第2原発)を経由して何かやるとか、いろいろ工夫してやっていたと思う」

免震棟の緊急時対策本部で事故対応に追われる吉田氏に、官邸から直接連絡が入った。